



社会全体の幸福のために 個人のあり方に目を向ける教育を

元陸上選手・Deportare Partners 代表 為末 大

私は、長年の競技生活を通じて、海外でも生活し、様々な国の人々と交流を重ねてきました。現在の仕事では、医療や経済、教育など、多様な分野の専門家と話す機会があります。そこで思うのは、社会全体の幸福量を上げるために個人がどう振る舞うべきかを、一人ひとりがもっと真剣に考える必要があるということです。そして、陸上競技の指導者として、また一児の父として、周囲との関係性の中で自己のあり方を見つめる教育が重要だと感じています。

今、世界では経済格差が深刻な問題になっています。アメリカ大統領選挙やイギリスのEU離脱に見られるように、貧困層の不満が噴出し、社会システムに影響を及ぼしつつあります。社会的に不安定な国が多く存在し、一部の知識層がそうした混乱への危機感を強く感じていると、友人などを通じて見聞きしています。一方で、そのような国々における社会的成功者である知識層の多くは、成功の要因を個人の努力の結果と捉え、社会システムの問題に向き合おうとはしていないと感じます。その理由は、それらの国々では、社会階層によってコミュニティが分断され、幼少期から多様な周囲との関係を築く体験が乏しく、相手が生きてきた背景を想像できないからではないかと考えます。例えば私が住んでいたアメリカでは、高速道路を1本隔ただけで住民の階層が異なり、全く交流のない状況がありました。

日本でも経済格差が問題視されていますが、まだ完全に分断された社会にはなっていません。地域の学校には多様な背景を持つ子どもが通います。そこで、一緒に学び、遊び、時にぶつかり合うことを通じて、相手の内面や置かれた環境を感じ取り、行動できるようになっていくでしょう。

社会における個人の役割を意識した公教育がなされていることも、日本の大きな強みだと思います。日本の多くの学校では、子どもが校舎を掃除します。自分たちが使った場所をきれいにすることは、自分の何気ない行為と社会とのかかわりを感じ取る機会になり、そうした体験の積み重ねは、自分の行動が間接的に周囲に及ぼす影響を想像できる力を育みます。それは、貧困や環境の問題を始めとするSDGs*の達成に必要とされる力にもつながるはずです。

人は人に会う喜びを感じずにはいられません。大勢の人にもまれながら楽しいこともつらいことも体験して1人の魅力ある人間に成長し、他者を思いやり、社会全体の幸福を築いていく。そうした人を育む教育であってほしいと思います。

ためすえ・だい

1978年広島県生まれ。スプリント種目の世界大会で日本人として初のメダル獲得者。男子400メートルハードルの日本記録保持者(2021年1月現在)。現在は執筆活動、会社経営を行う。Deportare Partners 代表。新豊洲Brillia ランニングスタジアム館長。Youtube 為末大学 (Tamesue Academy) を運営。

* Sustainable Development Goals の略。2015年に国連が掲げた、持続可能な開発目標のこと。「貧困をなくそう」「飢餓をゼロに」など、17の目標と169のターゲットから成る。

